

Title	瀬野馬熊遺稿
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1937
Jtitle	史学 Vol.15, No.4 (1937. 2) ,p.188(700)- 189(701)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19370200-0188

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

スの國民的英雄である所以も明かにされてゐる。如何に王黨側の史家であるからといつて本邦の所謂忠君愛國者流の史家の様に史實を曲げようとする點がなくなつたゞ解釋上の觀點を異にするのは羨しい。

以上の二書は小冊子ではあるが大革命とナポレオン時代の概要を知るに好適である。のみならず、從來も *Encyclopédie par l'Image* 叢書中の *La Révolution française* (A. Alba); *Napoleon* (Ch. Moreau-Vauthier) (Lib. Hachette) といふ幾分小型の同種繪入小冊子が寧ろ他の側に屬する史家によつて出版せられてゐるが、それらよりも遙かに鮮麗なる挿繪と體裁の美しさに長所があり、フランスの歴史描寫の方法を知る上からも興味あり、有益なるものと信ずる。翻つて國史に於ても、かゝる普及的良書の出ることを冀はざるを得ない。價各五フラン五〇。(平山榮一)

瀬野馬熊遺稿

朝鮮史研究家として令名高かつた著者が昭和十年五月廿一日に長逝せられ、それを記念する爲朝鮮史編修會の同僚諸氏が、同氏が諸雜誌に發表せられた諸論文の中最重要なものを選び、菊版本文四七〇頁の大冊として發刊したものが即ち本書である。著者は篤實なる學風を以て鳴り、その最も得意とするところは半島の歴史を難解ならしむる黨争問題であり、また吾人にとつて興味深い日鮮關係史であつた。本篇に集められた諸論文の中「高麗惠宗朝の内亂」、「高麗妙清の亂に就いて」、「燕山朝の二大禍獄」、「朝鮮黨争の

起因を論じて士禍との關係に及ぶ」は前者に屬し、「倭寇と朝鮮の水軍」、「正統四年桃渚の倭寇に就いて」、「今川大内二氏と朝鮮との關係」、「正統癸亥約條に就いて」は後者の範圍である。是等の諸研究は何れもその發表當時我國の學界に功獻する所大であつた金玉の諸篇であり、今一冊に纏められて學徒の便宜此の上もない。我國の倭寇が朝鮮明の海岸を掠奪すること多年に汎りしに拘らず文祿慶長の役に我水軍の敗れたのは何故であつたかといふことは少時國史を學んだ際胸中を往來した疑問であつたが、著者は大正四年史學雜誌に發表した「倭寇と朝鮮の水軍」の中に高麗朝の末年より季朝の初世にかけ、半島沿海の各道を暴れ廻つた倭寇が朝鮮の水軍を異常に發達せしめ、後半秀吉の軍が侵入した時之を阻止するに與つて力あつたことを證明し之に明瞭な解答を與へてを。歐洲の大陸を席卷した天才的英雄ナポレオンが後年敗退したのは永年の戰役に依りその戦法を敵に學ばれた爲であるといふ。絶えず邊境に武を用ひつゝある現代の我國策も他日隣國の防備を強化して往年の水軍の覆轍を踏むことなくば幸ひである。綿密な著者の考證的論文は、一見迂遠に似て實は現代の吾人に切實な教訓を與ふる所頗る多い。儒教的國家は今日東洋の再建を叫ぶ吾人にとつて範とすべき國家形態ではあるが、一面あまりに道義的主觀的に傾くことは些々たる學問的感情的差違から熾烈なる黨争の弊害を生みだす缺點を有してをる。黨争の原因は多々あるであらうが、東洋政治史の痛ともいふべき此の黨争問題の眞因を追求した本書の諸篇から他山の石と爲すべき教訓を見出だす所頗る多い。要するに本書は種々の見地より見て東洋史學史上有益な刊行

物であり、此の良書を世に呈上せられた遺族及び同僚諸氏の好意に衷心より感謝しなければならぬ。(松本信廣)

歐羅巴地誌 (有賀春雄著) (刀江書院發行)

今日の歐羅巴が、單に歐羅巴人の歐羅巴ではなく、世界人の歐羅巴であることは何人も認める所である。今日、歐羅巴の一角に發生する事件は、直ちに全世界の利害に重大なる關係を及ぼすのである。されば、昨日の歐羅巴を省みて、以つて今日の歐羅巴を認識し、更に進んで明日の歐羅巴に思を致すことは吾人の當然なすべき任務であらう。

此の觀點に立つて、本書を公にせられた著者の努力に對して敬意を表するものである。元來歴史家である著者の本書中に於ける苦心は充分に認められる、それは從來の所謂地誌類に例を見ぬ程度に、多分に史的考察を行つて居ることである。孰れの大陸の國家にもせよ、その地域の自然的現象を第一に、しかも充分に、究めることは地誌作成上勿論必要ではあるが、その國の文化發展の段階を念頭に置かぬ時は、その地理學的全要素を完全に把握せるものとは言ひ難いのである。その點、歴史家としての著者の立場は有利である。純粹の自然地理學者の立場よりすれば、その地的敘述に對しては多少の不足を感じる向もあらうが、著者もその序に言へる如く、本書が地理學を專攻するに非ざる一般學生或ひは一般讀書人を對象とすることを思へば、寧ろ史的考察にその特色ある點を尊重すべきであらう。

本書内容は、之を第一章總説、第二章西部ヨーロッパ、第三章中部ヨーロッパ北部の(一)、第四章中部ヨーロッパ北部の(二)、第五章中部ヨーロッパ南部、第六章東部ヨーロッパ、第七章地中海沿岸諸國の全七章に分ち、各章を見るに、必ずしも地理的區分に従ふことをせず、地形的、氣候的に區分されて居る。要するに歐羅巴を縦に三分して西部、中部、東部となし、之に地中海諸國を加へたのであるが、スウェーデン、ノールウェー、デンマーク等の國家に對しては、從來の「北部ヨーロッパ」なる區分を與へ且つ寫眞を挿入してはと思はれないでもない。

然し、一般の記述の懇切を極めたること、加ふるに多數の適切なる地圖を隨所に參照されたことは特に本書の價値を大ならしめる所以である。

之を要するに、著者がよく現在世界の情勢を會得せられて、その最も中心舞臺である歐羅巴の知識を比較的平易に示されたことに深く敬意を拂ふと共に、歐羅巴の今後の推移に關心を有つ世人一般に是非一讀を奨むる次第である。内容本文三〇〇頁。定價二圓二十錢。(犬塚久雄)

日土大辭典 (日土協會編)

國際間の交渉は益々頻繁となりつゝある、且つアジャの東西に強大なる獨立國をなす日土の兩國は、文化的交渉及び通商貿易に於ても次第に密接の度を加へつゝあるが、それなのに今日に至るまで未だ兩國語を以て直接意志を疏通するまでに至つてゐなかつ